



IAAL

Institute for Assistance of Academic Libraries

ニュースレター

アイアールニュースレター

【特集】

情報リテラシー教育

OCT 2008

No.2

「図解コミュニケーション」で 図書館職員の仕事を直そう

多摩大学経営情報学部

久恒啓一

私は文章と箇条書きを主たるコミュニケーション手段とする現在の組織や仕事のあり方に対して疑問を持っており、「図解コミュニケーション」という造語を用いて気持のよい社会をつくらうという主張をしています。

最近大学図書館職員と接する機会があり感じたのは、図書館という狭い世界だけで完結している人が多いことです。自分の図書館が属す大学の理念や人材育成の方向とは無関係に毎日の仕事をこなしている人が多いように見受けられました。図書館職員は他の組織と同様、あるいはそれ以上に長年文章中心の教育を受け、文章を操りながら仕事に接してきています。

どのような仕事も本質はコミュニケーション活動にあり、理解・企画・伝達というサイクルを上手にまわしていければ成果があがります。大学の理念を理解したり、図書館の考え方を学生に伝えることは他人とのコミュニケーションであり、新しい企画を考えることは持っている知識や経験とコミュニケーションをとることです。このコミュニケーションの中心が文章ですから、仕事の現場は見晴らしが悪く、混乱の中で私達は疲労感と徒労感にまみれているのです。

文章最大の特徴はごまかしがきくことです。また箇条書きは各項目の大きさもあわせないし、重なりも示せないし、項目同士の関係も表現できないから、本質をつかむことは難しい。「全体の構造と部分同士の関係」を明らかにできる図解コミュニケーションという考え方を取り入れたらもっと楽しく仕事ができるはずです。大事なことは各項目の関係で組みあげられた体系図です。図を描くという行為は、関係を考えることであり、実は考えることに直結しています。

目の前の学生に対するサービスという仕事は大事なのですが、大学の人材養成の一端を担っていることを改めて確認してみましょう。自分の仕事と図書館との関係、図書館と大学との関係、大学と社会との関係...を考えながら図にしてみましょう。例えば自らの大学の人材育成の理念と蔵書のマッチングなどに特色を出していますか。こういった「関係」を意識して仕事にあたることによって、初めて自分のやっている小さな仕事の意味と意義が腑に落ちてきます。図解コミュニケーションの考え方とその技術を学んで、広い社会とつながって、いい仕事をしたいものですね。

⇒ 図解 Web : <http://www.hisatune.net>

大学生の情報リテラシー

慶應義塾大学文学部 上田修一

雑誌記事を探しなさいと言われ、大学の蔵書目録検索システムを探している学生を見て、昔なら最近の学生はこれだからと笑うこともあったでしょうが、今はそうはいきません。こうした話題自体が陳腐ですし、笑っている本人は、その学生が得意とするパワーポイントのスライドにアニメーションを付けるスキルを多分持っていないのです。それに、国立国会図書館蔵書検索・申込システム（NDL-OPAC）では雑誌記事を探することができるのですから、その学生が間違っているとも言いきれないのです。

大学生は、四年間の大学生活を通じて、様々な知識や技能を獲得していくはずで、その知識や技能の一つとして、情報リテラシーがあります。文献探索法や論文執筆法について、昔から大学教育の中での重要性が指摘されてきましたが、これらをまとめて「情報リテラシー（information literacy）」と言い始めたのは、最近のことです。

情報リテラシーに関するよく知られた文書には、米国大学・研究図書館協会（ACRL）「高等教育のための情報リテラシー能力基準」と国際図書館連盟（IFLA）情報リテラシー部会の「生涯学習のための情報リテラシー指針（草案）」とがあります。ACRLの能力基準では、情報リテラシーを「情報が必要になったことがわかり、必要な情報を上手に見つけ出し、判断し、利用することができるように、一人一人が身に付けるべきひと組の能力」と定めています。さらに、情報リテラシーは、「学習者が（教授内容を）自分のものとし、探索範囲を広げることができるようにし、さらに自立し、自分の学習全体をコントロールできるようにする」ものとかかなり広く捉えています。

情報リテラシーの具体的な内容は、先のACRLの能力基準を参照すると、(1)情報ニーズの明確化と情報源の知識、(2)調査方法の知識と情報検索技術の習熟、(3)情報と情報源の批判的な見方、(4)得られた情報を自分の知識として組み込む方法、(5)特定の目的のためにその情報を使いこなす能力、(6)情報の探索と利用に関わる倫理や法の問題についての知識です。大学生は、卒業するまでにこうした知識や能力を持っていることが求められています。

けれども、実際には、図書館や情報リテラシーと無縁なまま卒業する多くの学生がいます。その反面、少人数のゼミや教室で、教員や大学院生から徒弟制に近い形で指導を受け、情報リテラシーを身につけている学生も多いのです。自然科学分野だけでなく、人文社会科学分野でも手厚く面倒をみている教員は少なくありません。

そうなると、情報リテラシー教育を行う前提として、こうした実態を調べることにともに、情報リテラシーを客観的に測る手段が欲しくなります。図書館の行う情報リテラシー教育の実態調査は、最近行われていません。文部科学省の『学術情報基盤実態調査結果報告』には「情報リテラシー教育」という調査項目がありますが、中味はどういうわけかコンピュータ利用教育となっていて役立ちません。実態調査を行う必要があるようです。

入学時にどれほどの情報リテラシーがあり、卒業時にどれほど向上したかを測ることは、全く行われていませんし、測定するという発想もありません。米国では、情報リテラシー能力を測る手段として、アメリカのジェームズマジソン大学が開発した「情報リテラシーテスト」（Information Literacy Test）

があります。これは、上述のACRLの五つの能力基準のうち、「(4)得られた情報を自分の知識として組み込む」を除いた四つの基準に関係した60問からなるウェブを使った試験で、図書館の仕組みや引用文献の記載方法などを知っていれば「達人」ということになるようです。

平成19年に、ある学部属する学生から各学年8名ずつ、計32名を公募して、図書館目録の使用法の習熟度を調べました。大学生は、学年が上がるに従ってオンライン目録の使用法に習熟していくという仮説を立てていました。ところが、課題を出して目録検索実験を行ってみると、学年が上がっても正答する者は増えませんでした。さらに、正答率は目録検索システムの知識や利用経験の長さ、あるいは情報技術の技能と関係していませんでした。

この学部では、入学時に全員に図書館員が目録利用法を教えており、またゼミ単位での図書館ツアーも行われていますが、それらを受講したという記憶

を持っている者もわずかでした。もちろん、こうしたテストの結果を情報リテラシー教育の効果と短絡的に結び付けることはできません。

被験者である学生たちの聴取記録を読んでいて、正答したかどうかとは別に、文献の種類や構造、目録探索について、正確な知識を持っている者は少ないように見受けられました。多くの研究者や図書館員は、自分で気付かない間に情報リテラシーにあたる知識を身につけてきていますが、それは例外的なことと考えられます。最初に述べたことと重なるのですが、一般の学生にとっては、「OPACの操作法」ではなく、本と雑誌の違いや目録になぜ一覧表示と詳細表示があるのかといったような前提となっている事柄から始めたほうがよさそうです。

実態調査や測定方法を含めて、もう一度、効果的な情報リテラシー教育のありかたを考える必要があるのではないのでしょうか



学習過程に寄り添った 情報リテラシー教育

～学校図書館の実践から～

国士館大学21世紀アジア学部 桑田てるみ

学校図書館は、「教育課程の展開に寄与する」ために、児童生徒の学習に多様な面から支援する必要があります。そこで学校図書館では、資料検索の指導、読書の推進を行うだけでなく、各教科に必要な情報活用能力や読解力、探究学習に必要な知識や技術を育成する「情報リテラシー教育」も行います。

学校図書館が、どのような「情報リテラシー教育」を行っているのか、『中高生のための情報活用ワークシート』（図1）を例に教育手法を紹介します。このワークシートは、首都圏の私立中高の自主的な研究会が調べ学習時の実践を持ち寄り作成したものです。従来の利用指導事例を集めるだけでなく、問題解決プロセスの中で学校図書館は何ができるか、生徒はどこでつまづいているのか検討した結果も織り込んでいます。そのため、問題解決のプロセスである“Big6 Skills”^{*}に沿って、「テーマ設定」「引用法」「情報の収集」「論文の執筆」などが段階的に指導できるよう編集されています。大学図書館でも参考になる事例が豊富です。



図1

『中高生のための情報活用ワークシート』 実践例

「ステップ0」

探究学習を始める前の生徒に、なぜ調べるのか、探究の前後で知識がどう変化するかなどを説明します。知識構造の変化を、ブルックスの方程式 ($K[s] + \Delta I = K[s + \Delta s]$) を用い説明する学校もあります。探索の意義を確認させることで、探索に対するモチベーションは変化します。

「ステップI」「ステップII」

問題解決プロセスでの重要ポイントとして「テーマの設定方法」を指導します。テーマの方向が明確にならないまま調べ始め、情報の海に溺れる生徒の存在が問題となっています。そこでまず、テーマに関する既知の知識と未知の知識を認識させ、探究すべき点を明確にするために、「マンダラート法」や「コンセプトマップ」を利用します。さらに「5W 1Hマップ」を使い、テーマに関する基本的な疑問「いつ、どこ、だれ、なに、なぜ、どのように」から考察ポイントを絞り込ませます。田園調布学園中等部高等部図書館では、5W 1Hマップを「きっかけDEマップ」と名付け、学内で行われるすべての探究学習の第一ステップとして活用しています。

「ステップIII」

「ステップI、II」の段階でテーマが明確になっていれば、OPACやデータベースの利用方法、キーワード検索方法をより具体的に提示できます。学校図書館では、情報検索技術を学習過程と関連せずに単独

図2



で教えた結果、生徒に技術が定着しなかったという経験があるため、「テーマ設定と絡めたキーワード検索の指導」を目指しています。大学図書館でも問題解決プロセスから切り離された検索指導に限界を感じていないでしょうか。

「ステップⅣ」

探索した文献の読み解き方や情報の抜き出し方、抜き出した情報の扱い方について教えます。「情報カードの書き方」「引用の方法」「参考文献の書き方」などを伝えることも学校図書館の指導範囲です。カリタス女子中学高校図書館では、「情報カード」を進化させた「論理フォーム」(図2)を作成し、自分の主張を支える根拠を文献から収集する必要性、また、文献の出典を明記する必要性などが学べるように工夫しています。ネットから丸写しする大学生が問題となっていますが、中高でも同じ問題を抱えています。しかし、このステップを指導することで丸写しの問題が解消されつつあります。

「ステップⅤ」

自分の探究結果をまとめる段階です。論文の構成を「序論・本論・結論」と説明するだけでは生徒は何も書けません。「序論」に書くべきこと、「本論」の展開方法などを具体的に伝える必要があります。ステップⅣで作成した「情報カード」や「論理フォーム」を執筆にどう役立てたらよいのか、実例を示します。

「ステップⅥ」

学習過程や探究過程を振り返ることで、「問題解

決(探究)のために必要なプロセスは何か」を確認してもらう狙いがあります。

このワークシートに掲載された知識や技術のどれもが大学生にも不足していると実感しています。たとえば、テーマが明確でないため情報検索が失敗する、収集した情報を処理する方法やまとめ方がわからないのでレポートが書けないなど、問題解決プロセスのどこかでつまづいているのではないのでしょうか。問題解決プロセスのつまづきに対処する情報リテラシー教育の手法は、大学図書館でも有効に機能するはずです。むしろ、探究してレポートを書くという問題解決学習の機会が多い大学生にこそ有効です。また、学習過程のステップを追った教育方法は、細切れにしか学習支援ができない学校図書館よりも、講習会の連続開催が容易な大学図書館の方が向いています。

学校図書館では「情報リテラシー教育とは、単に文献探索の技術を教えるだけではなく、学習者に必要な問題解決(探究)プロセスとそのプロセスで必要となる技術や知識を包括的に教えること」との共通認識ができはじめています。大学図書館が考えるべき情報リテラシー教育の方向性も同一ではないでしょうか。「学習者の学習過程に寄り添った情報リテラシー教育」を実践することが、館種を超え学校図書館にも大学図書館にも期待されているのではないのでしょうか。

* Big6 skills : <http://www.big6.com/> を参照

PCレンタルシステム導入で 利用者へのサービスが向上

大学図書館でのノートパソコン貸出は、レポートや資料を作成するためのツールとして最近では多くみられるサービスだが、この貸出サービスにおいて、さまざまな問題点が浮上していた明治大学図書館で、2008年春、(株)フルタイムシステムの「ノートPCレンタルシステム」を導入。これによって、レファレンスなどへのスタッフの有効活用度が高まり、利用者へのサービスが大幅に向上した。大学図書館で皮切りとなる無人ロッカー導入の経緯と、システム開発にあたった(株)フルタイムシステムに話を伺った。

ノートパソコン貸出の問題点とは

中林 明治大学図書館では近年ノートパソコンの貸出を積極的に展開してきました。昨年度まで貸出返却業務は対面サービスで行っていましたが、土日や遅い時間帯には対応できない、人員配置が有効ではないなど、人手を要する管理上問題の多いサービスでした。そこで、なにか良いソリューションはないかと模索していたんです。駅のロッカーのようなタイプから調査を始めて、様々なサービスを調査したのですが、なかなか手離れの良いソリューションと言えるものが見つかりませんでした。行き詰まりを感じていたところ、知人のマンションで無人の宅配ロッカーの便利さを知り、『この宅配ロッカーと学生IDの連携だ!』と確信しました。そこで宅配ロッカーマーケットを調査したところ、最大手のフルタイムシステム(以下FTS)さんに出会ったのです。相談をさせて頂く前にロッカーが配置された友人のマンションで実物を見たり、説明を聞いたりすると入念に下調べをしました(笑)。

開発する上で求めたものは

中林 第1に完全お任せモードの手離れの良さですね。貸出時間になれば受付を開始し、未返却PCがあればその情報が把握できる。もちろん直感的に利用方法が分かる事も重要です。説



(株)フルタイムシステム
システム開発部 専務執行役員
坂 正明さん

明していたのではスタッフの負荷軽減になりませんか。第2には利用者情報が逐次把握できて、集計、再利用ができることです。

開発にあたるうえで 苦労した点は

FTS 坂 当初から、中林さんが提示された仕様が非常に整理されていたので、システムの開発上で意外な程難関はありませんでした。通常の仕様打ち合わせでは、感覚的な表現での要望や、数回の打合せの中でご希望の内容が結構変更になることが多いため、こんなに簡単にはいかないのですが、中林さんがSE畑出身ということもあって、学生の身分証明書との連動や必要情報のコード開示など、開発側の作業はスムーズにできましたね。ただ、問題といえば納期が短かったこと。短期間のため、使用できるOS(オペレーティングシステム)が、簡単な方法でしかできなかった。これが唯一の心残り。仕様は満足しているのですが、もっとじっくり仕込めば、より便利に仕上げられたかもしれないというソフト屋の欲ですかね。

中林 納品していただいたロッカーは、もちろん最初から100%ではなかったけれど、細かいところまで目配りいただき、想定していた以上の機能が備



明治大学学術・社会連携部
図書館事務局 図書館管理グループ
中林雅士さん

無人で簡単運用できるPCレンタルシステム



「貸出」「返却」のメニューを選択する。「ライブラリー」は管理者がさまざまなログを確認できる



認証キーを挿入すると貸出の場合、パソコンのあったボックスのドアが開く



保守メンテナンスは、直営のFTS管理センターと連携しているので、24時間の問い合わせに対応。年1回の定期メンテナンスや機器トラブルの現地対応などサポートも充実する

開いたボックスからPCを取り出す。返却の場合も同様に、ドアが開いた空きのボックスに返す



わっていました。図書館に出入りされるベンダーさんは、マーケットが小さいせいか要望に対して「できない」とあっさりと断り、ビジネスとしてとらえてくれない事が多いんです。実を言うと、ほかの大学でも同様の利用改善をしようという試みがあったのですが、やはりベンダー側に不満や不足があり、納得いくものにならないという声を聞いていました。FTSさんは私たちの要望にもしっかり応えてくれた。感謝に尽きます。

FTS 坂 当社は宅配ロッカー総合メーカーですので、99%のビジネスがマンションへの導入でした。中林さんから案件をいただくまで、大学に私達のソリューションが必要だということに気付かなかった。最初の苦勞など小さいもので、こちらこそ感謝したいぐらいです（笑）。

システム導入でのメリットは

中林 なんといってもノートパソコンの利用時間が格段に広がり、対面サービスだった頃の待ち時間がなくなったことで、学生には大変喜ばれています。また、従来のように記入する手間がないので、手続きに費やしていた職員の時間も有効になり、レファレンスなどのサービスが手厚くできるようになりました。なにしろ、カードを入れて10秒で処理ができるのですから、とにかく早い。そして手離れが本当にいい（笑）。

FTS 坂 このシステムにはいくつかの特徴があるんです。まずは、24時間365日の運用が可能なこと、宅配ロッカーで構築したサービスセンターがあるので職員さんが気付かないトラブルもウォッチしています。万が一の故障時の修理受付なども24時間365日できます。

中林 そうですね。ですから当然私たち管理者の負担は大きく軽減されるんです。今までは貸出票を記入してもらって、その情報を表計算ソフトに転記して、〇〇学部の利用が多いとか、△△時～□□時の利用が多いなどとカウンタースタッフが時間を割いて行っていた利用分析が、実に短時間で的確に行えるようになりました。もしかしたら、貸して“あげる”“もらう”という微妙な上下関係も、ロッカーが相手だと無くなりましたから、これもすごいメリットかもしれませんね。そして貸出・返却のログデータがパソコンから閲覧できるので、ネット回線で遠隔地からの集中管理も簡単です。つまり、利用状況を様々な角度から簡単に分析できますし、複数校舎での運用も簡単にできるんです。

今後の改善、開発側の展望は

中林 嬉しいことなのですが、ロッカーを導入してからパソコンがすべて貸し出されてしまうケースが

多いので、在庫のアナウンスができるといいですね。それと、仕方が無いとは思いますが、ボックスがやや大きいかな（笑）。

FTS 坂 パソコンの在庫に関しては音声が出るよう

にできないかなど、現在、検討しています。ボックスは、納期の関係から従前の宅配用を利用させていただきましたのでパソコン用としてはちょっと大きいかもかもしれません。これも含め、さらに使いやすいシステムに改善していきたいですね。

中林 学生証とSuica（スイカ）^{*1}との連動を進めていますが、これに関しても懸案事項ですね。

FTS 坂 開発にあたって中林さんから、学生がロッカーのドアを閉め忘れないようにしてほしいといわれ、ドアを閉めるとカードが出るようなシステムを作ったのですが、ICカードだと非接触のため、カードの出し入れをしないことが基本です。そして、世の中のICカードはタッチ操作が主流。これをどうやって解決していくか、エンジニアとしての醍醐味であり、また、頭の痛いところなんです。とはいえ、すでに頭の中で構築はできていますけど（笑）。

中林 この技術を応用すれば、今後、無人ロッカーをさまざまなジャンルで活用できそうですが。

FTS 山崎 ええ、最近お話を伺った大学様では、図書館のみならずメディアセンターでの利用を検討下さるとか、非常勤講師のように研究室を持たない先生の控え室に教材やPC管理用として利用価値があるなどのご意見を頂戴しています。単にパソコン管理箱以上の利用価値が大学という場にはあるようです。当社は現在、宅配ロッカーから一歩踏み込んだ幅広い事業展開を進めていますが、学びの場で活用して頂けるようなサービスも一層検討して参りたいと思いますので、今後とも中林さんをはじめ、大学関係者の方々に声をぶつけて頂ければありがたいところです。

中林 今後の活躍を楽しみにしています。（敬称略）



（左）（株）フルタイムシステム 営業本部長 山崎修一さん
（右）本社営業部主任 土生川純治さん

株式会社フルタイムシステム

1986年創業。「究極の管理人」を目指す、宅配ロッカーの生みの親。通信システムを利用したオンライン管理、宅配ロッカーの開発、製造、販売、運営をする。最近では、ICカードを使用したマンションセキュリティシステム「F-ics」や、無人レンタサイクルシステム「F-rents」など、のサービスを提供する。「PCLレンタルシステム」は、管理者メニューから貸出、返却のログデータが閲覧可能。インターネット回線で遠隔地からの集中管理もできるので、複数の校舎での運用も簡単にできる。

問い合わせ：☎03-3851-5831（東京本社代表）
URL <http://www.fts.co.jp/>

^{*1} SuicaはJR東日本のICカード、JR東海では「TOICA」、JR西日本「ICOCA」として同様のICカードサービスが展開されている。

大学図書館の
最前線

東京女子大学 「マイライフ・マイライブラリー」

— 学生の社会的成長を支援する滞在型図書館を目指して —

東京女子大学図書館 橋本春美

東京女子大学は、2007年度に文部科学省が公募した「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラムの「マイライフ・マイライブラリー」で選定され、11月から文部科学省の財政的支援を得て、図書館において、このプログラムを実施に移しています。

マイライフ・マイライブラリーは、図書館を、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援）、活気に満ちた知的探求の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する「学生協働サポート体制」を整備するプログラムです。このため、ハード面では「多様な学生ニーズに対応した空間」、ソフト面では「多様な学生ニーズに対応した『学生協働サポート体制』」という大きな2本の柱からなっています。

マイライフ・マイライブラリーによって、図書館が、資料提供という従来の機能を超え、かつ、他部署との連携をはかりながら、学生の社会的成長を総合的に支援する場に発展しています。

ハード面

学生支援GP（Good Practice）の選定を受け、大学の経費により年次計画で行われる予定であった図書館1階を中心とする大幅な改修を2007年度中に行い、2008年4月より、新たなフロア構成の図書館に生まれ変わりました。

メディアスペース

シンククライアントのデスクトップPC（Windows）が約50台設置され、インターネット検索や図書館

資料を使ってレポート作成ができます。また、メディアスペースの一角には、AVブースが4つあり、各ブースは3人まで一緒に視聴できます。

コミュニケーション・オープンスペース（表紙写真）

会話が自由にできるため、グループ学習の場としても利用されています。その際、貸出用のシンククライアント・ノートPC（計20台）を利用し、メディアスペースと同様に、図書館のデジタルコンテンツを利用することもできます。

プレゼンテーションルーム（p.8写真）

ガラス張りとなっており、小規模の発表や学内イベントに利用されています。また、情報リテラシー講習や基礎的の日本語能力養成講習にも活用しています。

グループ閲覧室

従来3階にあった3室に加えて、元の館長室や応接室を利用して1階に3室設けました。遮音性が高く図書館資料を利用した密度の高いグループ学習に利用できます。貸出用のシンククライアント・ノートPCの利用も可能です。

個人ブース

8室あり、一人で集中して学習するのに最適な空間を創出しています。もちろん、貸出用のシンククライアント・ノートPCが利用できます。

リフレッシュルーム

学習・研究から一息入れることができるようにと飲食可能にしています。ここでも、貸出用のシンククライアント・ノートPCの利用が可能です。

このように多様なスペースを提供することによって、学生の多様なニーズに応え、なおかつそれらのスペースにおいては、従来からの図書館資料（＝紙

媒体の情報)とPCを利用したデジタル情報がシームレスに利用できる環境を整えており、学生の学習環境が格段に向上しています。

また、本学図書館は、地下1階、地上3階建てとなっており、新しいタイプのスペースを創出した1階以外の、地階、2階、3階においては、従来通りの静謐な環境を維持しています。

ソフト面

「学生協働サポート体制」における学生アシスタントはボランティア・スタッフ、サポーター、システム・サポーター、学習コンシェルジェの4種類です。大学での学習や環境の変化に適応できずにいる学生を身近な立場で支援するとともに、学生アシスタントも支援される立場から支援する立場に変わるという経験を通して、自身の成長がはかられています。さらに、ボランティア・スタッフからサポーターへ、そしてシステム・サポーターや学習コンシェルジェへとステップアップしていく一連の形が、ロールモデルとなり、学生の成長が期待できます。

ボランティア・スタッフ：自分自身が図書館を利用する傍ら、他の学生の求めに応じて、利用方法等についての質問に対応。目印はオレンジのバンダナと机上のバルーン。

サポーター：配本・書架整備などのアルバイト業務の傍ら、他の学生からの質問に対応。目印は赤いエプロン。

システム・サポーター：メディアスペース等での

PC(計70台)の利用者への操作説明や、トラブルに対応。

学習コンシェルジェ：大学院学生により学部学生を支援。アシスタント・アイランドで、資料の探し方、レポート・論文作成についての、一般的で基本的な質問等に対応。

また、学習支援プログラムとして、今年度は次の2種類の講習を実施しています。

情報リテラシー講習：学生にレポート、論文作成における基礎的な知識を習得させるため、学術情報収集・整理・発信について講習する「レポートの書き方の基本」等を実施。

基礎的日本語能力養成講習：学生の日本語能力の向上をはかるために「文章の読み書きー入門編ー」等を実施。

以上のようにマイライフ・マイライブラリーが本格的に移動したことに伴い、利用状況に大きな変化が生じています。2008年4月から9月までの6ヶ月間の累計入館者数は、前年度比で31.1%増加し、これに伴い館外貸出冊数も前年度比で6.8%増加しています。学生支援GPの補助金を受けている間に、「マイライフ・マイライブラリー」の活動を軌道に乗せ、図書館が、従来の機能である「知の殿堂」に加え、学生たちの「学習を主とする学生生活の拠点」となるように取り組んでいきたいと考えています。

IAALの視点

「マイライフ・マイライブラリー」は、学生の学習を全面的に支援する本格的なラーニング・コモンズの試みとして注目しています。IAALは、講習会「レポートの書き方の基本」の講師派遣とそれに伴う教材作成をさせていただいています。

施設の中では、ガラス張りのプレゼンテーションルームが特

筆すべきものです。ここで講習会を行うことで、学習を支援する図書館の意欲を示すことができるでしょう。

また学習コンシェルジェの取り組みも、わが国では先端的な試みです。学生を育成する協働サポート体制が定着するには時間がかかるでしょうが、今後も注目したいところです。



IAAL教材「大学生のレポート作成法」(1)

〈内容紹介〉

米澤 誠

ねらい

大学図書館での情報リテラシー教育に関わりをもってから、そのウィークポイントは「情報の評価」と「情報の発信」の部分だと思っていました。この部分を強化することこそ、情報リテラシー教育を成功させるものだと考え、開発した教材が「大学生のレポート作成法」です。

多くの大学図書館で教えている「情報探索法」もしくは「図書館活用法」は、「情報の発信」をするためによい「情報の評価」が必要というコンテキストの中に位置づけられて、はじめてその意義が認知されるものです。よって単独で、情報探索法や図書館活用法に限定した講習会を開催しても、大学生はその重要性を認知できずに、参加してこないのです。

情報の発信方法にはさまざまありますが、まず「レポート作成法」を基本として考えました。レポート作成は、問題を見だし、調べ学習を行い、文章化して伝達するという、大学生が身につけるべき学習スキルの基礎だからです。レポート作成法の講習会により、よいレポートを作成するための要件を知れば、おのずと情報探索や図書館活用の重要性を認識することになるのです。

内容と特色

「大学生のレポート作成法」は4編からなり

ます。

「(1) 論述編」では、他人の意見と自分の意見を区別した論述の仕方、文献の参考と引用の作法、レポートの形式、本論の構成法、文献リストの書き方、序論の書き方などを学ぶことができます。「(2) 体裁編」では、伝えたい情報を予告する技術、伝えたい情報を区切る技術、語句体裁の統一技術など、「(3) 文章編」では、文体を意識した論述、短文を心がける技術、主語と述語を一致させる技術などを学ぶことができます。以上は大学生として最も基本的なレポート作成技術でありながら、教授される機会が少ない事柄です。私の通信教育科目でのレポート添削の経験からまとめたもので、きわめて実践的な内容になっていると思います。

「(4) 構築編」では、情報を収集しレポート内容を構築する手法について学ぶことができます。情報を収集してから、どのようにまとめていくかというプロセス・手法については、今まで分かりやすくまとめた教材はありませんでした。この「構築編」はそれに挑戦したもので、自分なりのテーマの決め方から、基本的情報の探し方、関連情報の探し方、レポートの骨子のまとめ方などを解説しています。今後、講習会などで利用しつつ、内容の改善を進めていきたいと考えています。

次回は、これらの教材の活用事例や活用法について紹介します。

「背から本タイトル?」

NIIの「目録システムコーディングマニュアル(以下CM)」
2.2.1 TR, 2.2.1E〔データ要素の情報源〕には、和図書のタイトル
の情報源は「標題紙(標題紙裏を含む)、奥付、背、
表紙とする。」と明記されています。では、これらの情報源
のあいだで表記が異なる場合は、どれを採用すれば良いの
でしょうか。

たとえば「鉄幹晶子全集」(勉誠出版)第23巻の本タイ
トルが何であるかを考えてみましょう。標題紙、奥付には「鉄
幹晶子全集23」としか表記が無く、背の下部には収録され
ている内容が「◆心の遠景 ◆光る雲 ◆霧島の歌」と3行
で書かれています。この場合、本タイトルを「鉄幹晶子全集」
とし、背にある収録内容はCWに記入するのが良いのか、
あるいは最も下位の書誌単位である背の「心の遠景、光る雲、
霧島の歌」を本タイトルとし、「鉄幹晶子全集」はPTBLと
するのが良いのでしょうか。最も下位の書名を本タイト
ルに採るのが原則ですが、標題紙にも奥付にも「鉄幹晶子全集」
としか表示がないのですから、背にしかないものを本タイト
ルとして採れるのか、という疑問が生じます。

そこでCMを調べてみますと、第53章 国立国会図書館
「日本目録規則」適用細則 C2.2〔2.2.1.2〕(情報源によっ
て書名の表示が異なるもの)―2.1.1.1Eに、「(1) 最下位の書
誌単位と認められるものがあればその書名」と書かれてい
ますので、それが背にあっても本タイトルとすべきである事
がわかります。Q&Aでも管理番号9000071500に「現代皮
膚科学大系」の背にある「総論～皮膚障害1」をTRに記入
するよう回答しています。このように、情報源によってタイ
トルの表記が異なる場合、いずれかに最下位の書誌単位が
記載されていればそれを本タイトルとして採用します。必
ずしも標題紙の表記が優先されるわけではありませんので
注意が必要です。(IAAL事務局:K生)



情報リテラシー

■ 明治大学図書館職員SDプログラム

明治大学図書館の特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）『『教育の場』としての図書館の積極的活用』の取組の充実を図るため、図書館職員の資質を向上させる高度なスタッフデベロップメント（SD）プログラムを企画し、平成20年8月から9月に実施しました。

このプログラムは、(1)図解コミュニケーション技術、(2)プレゼンおよび説明の技術、(3)授業実践法およびカリキュラムデザイン技術の3つのユニットからなります。それぞれのユニットでは、一流の講師による講演と、参加者が主体的・能動的に学習するグループ演習を行いました。各ユニットとも約40名の職員が受講しました。詳細については、別の誌面であらためて紹介させていただきます。

私たちは、図書館職員の資質を向上させることで、長期的には学生への学習支援だけでなく、教員の多様な教育活動をサポートできる図書館職員を育成することができると考えています。



目録スキル

■ 高等専門学校図書館職員向け NACSIS-CAT講習会

第10回高等専門学校及び技術科学大学図書館シンポジウム（長岡技術科学大学で平成20年8月18日から20日まで開催）のNACSIS-CAT講習会で、その講師を務めました。高等専門学校のような小規模で、また異動の多い図書館にとって、必要な講習会だと思います。今後とも、長岡技術科学大学図書館が企画する研修会に、何らかの支援ができればと考えます。

広報

■ 私立大学図書館協会総会・研究大会

第69回私立大学図書館協会総会・研究大会（國學院大學で平成20年9月11日から12日まで開催）にインフォ・デスクを出展し、広報活動を行いました。

■ 第10回図書館総合展・学術情報 オープンサミット2008（予告）

平成19年に引き続き、図書館総合展でIAAL主催のフォーラムを平成20年11月28日に開催します。

①作家・瀬名秀明が語る図書館活用法

瀬名氏は、綿密な資料調査により物語世界を構築する、図書館ハードユーザーといっただけでよい作家です。今までの小説を作り上げる上で、どのような資料調査を行ってきたのか、作品に即してできるだけ具体的に事例を語っていただきます。

また、小説執筆や研究の中で創造するために大事なことは何か、ユーザーとして図書館に期待することは何かについて語っていただくほか、最近作についても言及していただきます。図書館関係者とはひと味違う視点の方のご講演により、私たちが図書館活用法を再考する機会をもちたいと考えました。

②NPO法人大学図書館支援機構の活動報告

設立後1年間に実施した、情報リテラシー教育や目録スキルに関する新たな活動を中心に報告します。私たちNPO法人の活動の可能性と、皆さま方の参画の可能性を探っていただきたいと思います。

ご来場の方の中で希望者には、会場受付にて「気をつけたい図書館での派遣と委託のQ & A」を500円（会員は無料）でお分けします。アウトソーシング・請負事業に関する厚生労働省の各種ガイドラインを、図書館の場合にあてはめて解説した内容です。

講演、報告、資料とも、刺激的内容を準備しております。是非お問い合わせの上、お申込みください。参加申込先：forum@iaal.jp

> COVER



東京女子大学図書館
コミュニケーション・オープンスペース
(p.7記事参照)